

夏の終わりに

大原守明

とき・・・現代

ところ・・・北海道(札幌・後志)

* 人物

高木・・・60歳。停年退職、教員。

美紀・・・21歳。劇団員。

伊代・・・40歳。美紀の母。居酒屋の女。

豊司・・・40歳。漁師。

トメ・・・78歳。加工場経営者。

SE—夕暮れの札幌。丘の上の閑静な住宅街。高木家の居間。キリギリスの鳴く声。

美紀「先生、携帯かけたのに出ないんだもの。(見て)あ、ビール飲んでる」

高木「おお、お前だったのか。この頃、電話もおっくうでな」

美紀「停年になったんだって?」

高木「ああ。でもお前、よく帰って来たな。

何年振りだ?」

美紀「・・・中学卒業以来だから・・・先生とは六年になる」

高木「そうか、もうそんなになるか」

美紀「(虫の声を聴いて)ここ、静かねえ。

(縁側に立って)ああ、きれい!一面の夜景だ。街が一望できるんだね。先生、良い所に住んでいたんだ。・・・ススキノ、どっち?」

高木「うん。そのビルの陰になった」

美紀「陰か・・・(机上を見て)あっ、芝居の原稿。先生の字、懐かしいなあ。先生、

やっぱり書いてあるんだ。・・・そうか、ずっと家にいるんだものね。思い切り書けるね。いよいよプロだ」

高木「・・・」

美紀「オリジナル、何本仕上げたの?・・・脚本家が先生の学生時代からの夢なんだものね」

高木「・・・それが・・・だめさ。・・・だめなんだ」

めなんだ」

美紀「どうして?これ、ちゃんと書いてあるじゃない」

高木「・・・途中だ。みんな・・・途中で・・・」

美紀「(触れて)あ、ほんと。ほりかぶってる。どうして?」

高木「俺はいいから、お前の方だ。・・・東京で芝居やってるんだろう。幸運だよ、

お前は。いい役がついて、秋の公演に向けて激しい稽古やってるんだって?」

美紀「うん。すごく、すごく大変。ダメ出し、小返し。・・・長台詞の連続で、何度も

かんで、怒鳴られて。だから、くたくた。・・・それでも先輩達に助けられて・・・」

高木「お前、そんな大切な時に帰って来て・・・」

美紀「(ボツンと)母さんの納骨、だもの」

高木「えっ、納骨?お母さん、死んだのか」

美紀「去年の夏、すい臓ガンで・・・芦別のお寺、お父さんの墓へ入れて来た」

高木「そうか。知らなかった。失礼したな」

美紀「誰にも言わなかったもの。・・・一人で葬式やった。もう、一周忌・・・」

高木「・・・そうか。大変だったな」

美紀「・・・おとし、急に東京のアパートに訪ねてきて、そのまま倒れてしまって、そのまま入院。そして、そのまま。(間)

高木「そうか・・・」

美紀「(溜息して)・・・長い間の呑み屋疲れ。金疲れ。男疲れさ。・・・」

高木「・・・お母さん、一人で頑張っていたものな。何度か店で会った」

美紀「次々って・・・男に騙されて、それでもこりないで・・・バカ女の末路さ」

高木「・・・お前も、一人になったか・・・」

美紀「先生と同じだ。でも先生には別れた娘さんがいるから、少し違うかな」

高木「同じだ」

美紀「ビール、私にもちようだい」

高木「おい、お前、まだ・・・」

美紀「(笑って)いやあだ。私、二十一よ。ガキは終わったの。これでも私、東京では結構、大人やってんだから」

高木「そうか」

美紀「(台所で)グラス、これ、いい?」

高木「・・・大人か・・・おとな、なあ・・・」

美紀「なあに?」

高木「いや」

美紀「あら、このバッグどうしたの?旅行?・・・Tシャツ、靴下、洗面具・・・」

高木「ああ、ちよつとな」

美紀「私、悪かったかな、来て。・・・いつ、出かけるの?」

高木「ああ、明日とっていた。いや、特別

急ぐ用件でもないんだ」

美紀「どこ？」

高木「うん、ちよつと。前にいた処で・・・」

美紀「何か？」

高木「うん。古い教え子の事で、やつとな」

美紀「やつと？」

高木「うん」

美紀「遠いの？」

高木「・・・いや、後志の・・・田舎だ・・・」

美紀「私も行きたい。連れてって」

高木「・・・だってお前、稽古があるんだろ。早く帰らなきゃ」

美紀「休みもらって来たもの、三日。台本だつてちゃんと持って来てるよ」

高木「・・・しかしなあ・・・」

美紀「先生、電車でしょ。私、レンタカーだよ。送って行くよ。・・・先生のいた町見たいもの。昔の生徒に会ってみたくいの。・・・本当はね、知らない山や海、空を見て、気分を変えたいの。ねえ、先生、お願い。・・・なんだか、やり切れないんだもの・・・海がいいなあ。海のある町がいいなあ。私、海が大好き」

SE—美紀が運転する車の中。

美紀「先生んち、二階、涼しくていいね。ぐつすり眠った。・・・娘さんのパジャマ、

びつたり。・・・先生が、朝ご飯つくるなんてね・・・」

高木「もう、十年だ」

美紀「・・・娘さん、由香さんって言ったっけ。帰って来ないの？」

高木「ああ。一緒に出て行って、それっきりだ。・・・最近、結婚して九州にいるって聞いた・・・」

美紀「・・・淋しいね・・・」

高木「・・・」

美紀「・・・私は、高校を終えて、東京の専門学校へ行った。本当は、とにかく家を離れたかったの。・・・母子家庭のみじめつたらしい暮らし。母と女二人のじめじめした闘い。・・・もう我慢できなくなって。そして、東京では演劇ができる。・・・高一の時、高文連の大会で、特別に演技賞をもらった。うれしくてうれしくて。・・・でも有頂天になっていたら、上級生からいきなりビンタくらって、毎日のいやがらせ、いじめ。二年生で演劇部を飛び出した。・・・でも、卒業してみると、どうしても芝居がやりたくて。・・・いや、いじめまくった自分をパアッと、派手に変えるにはそれしかないと思った。・・・だから、東京へ」

高木「そうか」

美紀「・・・良く考えてみると、皆、先生のお陰」

高木「・・・」

美紀「何もない中一の私に、先生は夢を与えてくれた。新人の私を主役に抜きてくれた。驚いた。嬉しかった。だから、先生には一生懸命ついて行こうと思った。夢中で三年間演劇に取り組んだ。それが一生の生き甲斐になるように思えて・・・。母さんも喜んだ。時々先生が店に寄って、ほめてくれるって」

SE—夜の居酒屋。演歌が流れている。

伊代「(酔って)ねえ、先生。本当に美紀には、

役者の才能、センスがあるんですかね。先生がほめてくれるのは嬉しいんですけど・・・」

高木「ええ、ガキのくせにかなり理解力があるんですよ、芝居でも。それに、表現力、演技力も抜群でしょ。生まれた時から持ち合わせたセンスかな。・・・多くの子供達を見て来ましたが、まず、一人か二人しかいなかった。正式に訓練すればもっと伸びる」

伊代「(笑いながら)へえ、じゃ、天才だ。将来、舞台女優にでもしますか。栗原小巻みたいな。ハハハ・・・」

高木「そうだったら、すごいですね」

伊代「まさか、ですけどね。うれしいです。あの子に教えてやるのかな。ハハハ・・・先生、よろしくお願ひしますね。私、何にもみてやれなくて・・・」

SE—車の中。

美紀「私も、うれしかった。一層、夢中になった。でも、三年になると、先生、急に変わった。何だか、熱心でなくなった。時々、指導もサボるようになった。いらいらしてる時が多くなって。そして、そう、卒業が近づいた日。…」

SE—放課後の教室。下校のチャイムが鳴る。

美紀「ねえ、先生。私の進路のこと。私ね、まず高校へ行って、そして卒業したら東京へ出て、東京のプロの劇団に入っ。…」

高木「プロの活動をするの？」
美紀「それでいいよね。入団テストもきちんと受けて、合格するまで頑張つて、きつと。…」

高木「。…」
美紀「いいよね。ねえ」
高木「(一問一答)美紀。…」

高木「(一問一答)美紀。…」
美紀「なんでですか？」
高木「プロはな。いや、アマ、アマチュアでやれ。仕事を持って、仕事をやりながら、芝居をやるんだ」

美紀「えっ！……センスがある、やれば伸びるってのは嘘なの。先生が言ったことは嘘だったの！」

高木「嘘ではない」
美紀「他かに仕事を持ちながらなんて、私にはできない。演劇一本に人生全てをかけたみたいんだもの。一つに集中してできない」

高木「。…」
美紀「先生、変だよ。夏休みが終わってから先生、本当に変だよ」

SE—車の中。

美紀「先生は、今の私を怒ってる？」
高木「いや。すごい、すごいと思ってる。……幸運だなあと思う。……本当に、幸運なんだ」

美紀「。……幸運、か。…」
高木「。…」
美紀「(前方に気づいて)あ、先生、この三叉路、どっち？」

高木「真すぐ行ってくれ。その峠を越えると右側、眼下に海があつて、それをずっと進むと、下ると峠道があつて、そこに小さな町がある。漁村だが。昔は結構、活気があつた。三十年も前の話だがね」
美紀「三十年振り？」
高木「まあな」
美紀「どうして？」

高木「新任地の方が忙しくてな。いや、特別に来る用事もなかった。何かあれば、必ず連絡してくれる奴がいて、そいつがみんな。…」

SE—漁港。そのノイズ。カモメの声

美紀「うわあ、海だ、海だよ。港。……港に、漁船がいっぱい。すごいね。ああ、大きな電球を沢山つけた船が、並んでる。…」

高木「イカ釣り船だ。その灯で、イカを誘い集めて、そいつを釣りあげる。昔は、漁の頃になると学校が休みになったそう」

美紀「休みに？」
高木「中学生も一人前の漁師になるのさ。人手が不足なのさ。イカツケは一気にやらないと。……猫の手も借りたい農繁休暇と同じさ」

美紀「そんなにとれたの？」
高木「うん。でも、私が赴任した頃には、もうそんな事はなかった。鯨と同じさ」
美紀「そうなんだ」

高木「漁師も今は、大変なんだ」
美紀「それでも、次の出航の為にあややつて甲板を洗ったり、網を整理したり、準備しているんだ」
高木「そうだな」

美紀「ねえ先生、そら、あの船の甲板に立ってる人・・・ずっと、こっち見てるよ。知ってる人？」

高木「・・・」

豊司「(OFF)おい。先生、先生でねえか。高木先生でねえか」

美紀「先生のこと呼んでる。あ、来るよ」

豊司「やっぱり、先生だ。俺、豊司だよ。今村の豊司だよ」

高木「今村？おお、隣の組の」

豊司「そうだ、B組の今村だよ。やあ、しばらく振りだな。先生、変わってねえなあ。元気だったんだ。・・・ああ、懐かしいなあ。びっくりこいちゃった。似た人いるなあって、見ていた。(気づいて)あつ、娘さん？」

高木「ああ、まあ・・・車の運転で・・・」

豊司「で、何かあったか？」

高木「・・・」

豊司「だってよ、先生が来るなんて、余程のことがないと考えられねえものな。・・・あつ、盆後だから、栄子にでも会いに来たか。・・・栄子か、成程・・・栄子か。栄子、待ってるべ。喜ぶべ」

高木「・・・」

豊司「でもな。もうとつくになあ。・・・もう十二、三年になるべ、死んでから。(急にいら立って)どうして葬式に来てやんなかったんだ！同級生も皆、先生を待って

た」

高木「・・・知らなかったんだ」

豊司「誰か、連絡やんなかったのかよ」

高木「ああ。・・・この町のことは、いつも栄子が連絡してくれた。その本人だもの」

豊司「冷めてえと思つたよ。皆、そう思つたよ。冷めてえと」

高木「・・・悪かった・・・」

豊司「栄子、岬の突端から、身を投げた。・・・自殺って言うのがな、何としても分からねえ。何があつたのか、先生なら知ってるかも知れねえと、皆が。あいつ、先生の弟子みてえだったものな。あいつ、東京の大学の芸術学部の演劇科に入ったんだよ」

高木「・・・後から知つた。でも、無事卒業してそれらしい道で、頑張ってるんだろうと思つていた。・・・それが、偶然、会議で会つた石田先生から栄子の事を知らされて・・・シヨックだった。頭の中が真白になった。しかも何年も前の事だと聞かされて言葉もなかった」

豊司「それから、後を追うように母さんもだ。首をくくって死んだ。親方・・・ああ、父親はガンで今、街の病院に入院している。栄子の家は悲惨だ。・・・婆さんだけが元気で、加工場の若い者を仕切っている」

高木「そうか。大変なことになっていたん

だ・・・知らなかった」

豊司「・・・」

高木「そうか。・・・とにかく、行つてくる」

豊司「行つてくるって、栄子の家か？まじいよ。婆さん、きついぞ」

高木「いい。線香だけでも上げさせてもらう」

豊司「・・・先生、あんまり、あちこち歩かねえ方が・・・いいかも。・・・先生・・・」

高木「ありがとう」

SE—栄子の実家、加工場。乾燥機などの音。女工達の作業の音。

トメ「(大声で)おお、原料、イカ、ホッケが切れた。ストップだ。終わつた処から上がつていいぞ。(ドアを開けて)・・・栄子の先生だつて？・・・栄子は幼稚園から大学まで行つてるんだ。どこの先生だ。何？・・・中学校だ？」

高木「はい、私です。栄子さんの中学校の時の高木です」

トメ「知らねえなあ」

高木「一年の時の担任で、あつ、ずっと演劇部の顧問で、お世話になって・・・」

トメ「演劇？何だ、お前さんかい、張本人は(怒り出して)そうか、栄子に芝居をたきつけて、栄子の人生を狂わした奴は。そ

うかい、あんたかい。栄子はもういいねえ。もう関係ねえ、帰ってくれ。

高木「しかし・・・私は・・・そんな・・・」

トメ「帰ってくれ！」

高木「・・・せめて、お線香だけでも・・・」

トメ「とんでもねえ。よしてくれ、バチあたりが。帰ってくれ、気色悪い。早くここから立ち去ってくれ。帰れ、帰るんだ！（ドアを激しく閉める）」

美紀「・・・先生・・・」

高木「・・・参った・・・参ったよ・・・誤解だ。・・・誤解なんだよ。・・・こんな事になってるなんて・・・」

美紀「・・・先生・・・」

高木「・・・そうか・・・仕方ない・・・」

SE—林の中の墓地。弱いセミの声。

高木「ああ、これだ」

美紀「立派なお墓ねえ」

高木「うん。代々漁師の親方の家柄だから。歴史があるんだ。・・・ああ、栄子、二十八才だったか。・・・こんなになるなんて・・・」

美紀「可哀相にね・・・」

高木「うん。お前も一緒に手を合わせてやってくれ。同じ道の先輩だ。（墓に）栄子、遅くなった。悪かった。やっと来た。驚

いた、驚いたぞ。死ぬなんて・・・苦しかったんだな、つらかったんだな。俺に相談できない程つらい事だったんだな。・・・何もしてやれなかった。すまなかった。・・・でも、ひと言もなかったのは、悲しいぞ。寂しかったぞ。・・・いや、いい。・・・ゆっくり休め。みんな忘れて。ゆっくり休め・・・」

SE—海岸。渚の静かな波音。コオロギの声。

美紀「深呼吸して）ああ、磯の香りがする。やっぱり、海っていいなあ。（—間—）先生の旅・・・つらい・・・」

高木「うん。いや。・・・でも、こんなことになつてるとは・・・芝居なんかしなくたって、栄子は幸せな人生を送れたのに・・・優しい、思いやりのある、頑張り屋の栄子だった」

美紀「それが、先生のせいだ、だなんて」

高木「まあな。・・・そう言えば、こんな事があった。（回想的に）あれは栄子三年の文化祭だった。私の作品だったが、姉妹が協力し合い困難を克服して生き抜くという台本を選んでくれた。私は二年生の奈保子を姉の役に考えた。姉の役が主役だったからだ。奈保子には力があつた。しかし、三年生は、部長である栄子にす

べきだと譲らなかつた。二年生に主役をとられるのが、上級生として許せなかつたんだらう。しかし、栄子には声帯に故障があつて、声がいつも割れる。自分でも知っていて、いつも希望して演出を担当していた」

美紀「でも、皆に押されて」

高木「そうなんだ。私はそんな事で栄子に傷をつけたくなかつた。しかし、栄子は声をつぶしながら、必死に全幕を通した。私は栄子を替えた。ほめた。中学生として部長として、その努力と気迫がすばらしかつたからだ。・・・いつの間にかそれが町中に知れて、栄子はいつか町のプリマ女優に祭り上げられていた。栄子は、幼い時から日舞やピアノなど芸事を修めていて、すでに町のアイドルだった。母親がいつもつき人役」

美紀「代々の名家で、お金持ちだものね」

高木「一方、奈保子は山の貧しい農家の子だった。・・・（—間—）栄子が、演劇科を選出した事に当時私は違和感を覚えた。自分の事を一番知っている栄子だからだ。それなのに。・・・きっと周囲の者が許さなかつたのだから。町のアイドルスターを、今度は本物のスターに持ち上げようとしたのだ。・・・だから、卒業して、芝居の世界へ入らざるを得なかつた。役者になつたかどうかは知らない。しかし、何かに行きづまつた。芝居の何かに行き

づまった。挫折した。お譲さん育ちの栄子には立ち直る術はなかった」

美紀「……そう……そうね……」

高木「美紀、お前は幸運だ。特別に才能があるとしても、やつぱり、幸運なんだ」

美紀「……」

高木「芝居の道は甘くない。俺が知っている

る」

美紀「……先生……」

高木「……」

美紀「私……分かったの」

高木「うん？」

美紀「大変だつて事が、分かったの。(急に)

先生、ごめんなさい。私、先生に嘘ついてた。東京の劇団のこと。いい役がついて毎日稽古が忙しいって」

高木「違うのか？」

美紀「みんな嘘。嘘なの。ごめんなさい。本当はダメ人間。役らしい役なんてついた事ないの。あれば、通行人、群衆、バツクダンサー。食べられないから、バイト、バイト。いつかバイトが本業になつて……自分が何をやってるのか、分からなくなつた」

高木「……そうか……そうか……」

美紀「ごめん。先生がアマチュアでやれつて言つた意味が、やつと分かった。未熟者は、食べる事も頭に入れておかなければと。まず両立させる力をつけること。半端な生き様では通れる道でないこと」

高木「……いいよ。……栄子の死を知ら

せてくれた先生があの時、栄子が東京ですさんだ生活を送つていたと言つた。……そうだ、あの時の東京に行くというお前の必死な形相に、私は栄子の顔を重ねていた。……あれからだ。急に練習に力が入らなくなった。演劇が怖くなった。クラブの生徒が恐ろしく見えた。(間)定年になつても同じだった。原稿書いても集中できなかった。舞台をやっている時も、若い人の演出をしている時も、妙な罪悪感が、私をさいなむのだ」

美紀「先生、もういいよ。先生が栄子さんを殺した訳じゃないよ。先生、悪くないよ。そう思い込ませたとりつまきや、町の人や、お母さん、いや、本人の判断が甘かつたのよ。私、自分の事と合わせてよく分かる。先生、悪くないよ。……でも先生は、この町では大変なこと……」

高木「……そうだな。仕方ないさ。……弁解しても、もう遅い。……今、信用を無くした自分の無力さに、あきれているよ……わびしいね。……」

美紀「(間)でも、きつと分かる時が来るよ、先生のこと。(明るく)先生、元気出してよ。先生もだめ、私もだめつて言つたら、何だか悲し過ぎるもの、あ、家の母さんがね、死ぬ前に私に言つたの」

伊代「……美紀、お前、困つた事があつた

ら先生に相談したらいいよ。先生ならきつとお前の力になつてくれる。母さん、分かるんだ。よかつたら、お前、先生の子供にしてもらえ。そしたら、母さん一番安心だ」

美紀「馬鹿みたいでしょ。母さんたら。自分ではだらめばかりしていて、自分で仕末できなかった娘を、先生にあずけようつて言うんだよ」

高木「そうか……お前が……子供

か……子供に……」

美紀「(慌てて)冗談……冗談だよ、先生……」

高木「でも、それだけ信じていてくれたんだ。ありがたい、ありがたいなあ。……でもな、本当は違うんだ。……仕事、仕事つて、仕事にかまけて家庭をかえりみない、家族に見捨てられた、馬鹿親父なんだよ。……しようがないか……」

SE—美紀の携帯電話が鳴る。

美紀「あ、携帯。私？」

高木「……」

美紀「(出て)はい。……ええ、私です。美紀です。……えっ？本当ですか。……はい、はい、分かりました。勉強して……はい。ありがとうございます。……(切る)先生！大変

だ。・・・東京から。・・・どうしよう、役がついた。・・・助演出からの連絡。女Bの役。(台本を取り出してめくる)・・・台詞が・・・一、二、三、四・・・ああ、先生。十個以上もある。・・・やっぱり、幸運なんだ・・・」

高木「驚いて)おお、そうか。・・・よかつた、よかつた。やつたなあ。よかつたなあ、おめでとう。おめでとうだ。・・・これでダメ人間の一人は、ダメ集団から脱出できそうだ。・・・うれしいよ。よかつた、よかつた。・・・」

美紀「先生、ありがとう、ありがとう。私、もう一回挑戦する。やり直す。・・・本当にうれしい、うれしいです。・・・幸運なんだよね。・・・(陶醉している)」

高木「ああ・・・本当だ。気づかなかつた。・・・ああ、きれい。・・・オレンジ色・・・あかね色・・・夕陽なの?・・・雲が、赤とオレンジのひだになって。・・・ああ、海に映って、ゆらめいている。・・・だんだん広くなつて、・・・こつちへ来るよ。渡ってくるよ」

美紀「うん。海、海のあかりだ。大空からの照明(あかり)だ。・・・おお、お前の顔に映って・・・あ、美紀、そのまま、動くな。そのまま。・・・きれいだ。きれいだぞ。お前の目がきらきら輝いてい

る。お前がきらきら光ってる。・・・きらきらで行け。あ、動くな。・・・大自
然がくれた終幕への照明(あかり)だ。・・・もつと、目を見開け。真すぐ見つめる」

美紀「はい。(思い出して)・・・ああ、先生の演出だ。先生の演出が始まった。・・・はい、分かりました。幕が下りるまで、じつところえています」

高木「そうだ。そして、言ってみろ。・・・がんばる、がんばる。って言ってみろ。・・・そう、たつた今、俺が書いた台詞だ。・・・がんばる・・・がんばる、だ」

美紀「(大声で叫んで)・・・がんばる!・・・がんばる!・・・がんばる!・・・ああ、先生、だめだ。・・・涙が出そうなもの・・・がんばる!・・・がんばる!」

高木「栄子の代わりに、・・・きつと、がんばる。きつと、がんばるって、言ってみろ」

美紀「・・・きつと、がんばる!・・・きつと、がんばる・・・きつと・・・きつと・・・だめだ、先生。・・・前がぼやけて、何も見えないもの・・・」

SE―渚の波音。静かに続いている。

了